教材研究と教材の扱い方 (2)

―― 枕草子一〇一段「御かたがた、君たち」（清少納言）――

菅原敬三

一

枕草子一〇一段は、枕草子の中では日記的章段に入る。中宮定子賛美の段であるが、中宮を中心としたサロンの一面を物語っていて興味深い。短い本文なので引用する。

御かたがた・君たち・上人など、御前に人のいと多くさぶらへば、庇の柱に寄りかかりて、女房と物語などしてゐたるに、物を投げ賜はせたる、あけて見れば、「思ふべしや否や。人、第一ならずはいかに。」と書かせたまへり。

お前にて物語などするついでにも、「すべて、人に一に思はれずは、何にかはせむ。ただいみじう、なかなか憎まれ、悪しうせられてあらむ。二、三にては死ぬともあらじ。一にてをあらむ。」など言へば、「一乗の法なり。」など、人々も笑ふことの筋なめり。

筆・紙など賜はせたれば、「九品蓮台の間には、下品と言ふとも。」など書きて参らせたれば、「むげに思ひ屈しにけり。いとわろし。言ひ閉ぢめつることは、さてこそあらめ。」とのたまはす。「それは、人に従ひてこそ。」と申せば、「そが悪きぞかし。第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ。」と仰せらるるも、をかし。

中宮との言葉のやり取りが、作品の面白さになっている。高度な知的ゲームを楽しんでいるところがあり、読解するのに骨がおれるが、それがまた面白さにもなっている。

＊

事件の発端は、清少納言が「御前に人のいと多くさぶらへば、庇の柱に寄りかかりて、女房と」おしゃべりをしているところに、中宮が「物を投げ賜はせ」たことにある。それには「思ふべしや否や。人、第一ならずはいかに。（かわいがってあげようか、どうしようか。お前、第一でなかったらどうか。）」と書いてあった。当然、返事は要求される。中宮が「紙・筆など賜はせ」たので、清少納言は「九品蓮台の間には、下品といふとも。」と答える。

これから二人の間に言葉の交換が行われるのであるが、これには

事情がある。第二段に説明されていることであるが、中宮の御前で女房同士雑談などしている時に、清少納言が「すべて、人に一に思はれずは、何にかはせむ。ただいみじう、なかなか憎まれ、悪しうせられてあらん。二、三にては死ぬともあらじ。一にてをあらん。」などと言っていたのである。それを聞いた女房達は、「一乗の法ななり。(法華経に、仏の悟りに至る乗物は、法華経だけで、第二、第三のものはないとあるのによる。あなたには、それしかないのですねえの意)。と言って顔を合わせながら笑い合った、ということがあったのである。それをふまえての中宮の発言である。

ここで問題なのは、なぜ中宮が言葉をかけずに「思ふべしや否や。人、第一ならずはいかに。」と書いて寄こしたか、又、それに対して清少納言がなぜ「九品蓮台の間には、下品といふとも(まさに足りぬべし)。」と答えたか、である。ここには互いに相手の実力を認め合いながら、知的にゲームを楽しんでいるところがある。決して、中宮は清少納言に負けてはいない。むしろ、優位に立っているとさえいえる。主従の関係からであろうか、枕草子を読むかぎりいつも仕掛けていくのは中宮定子の方である。今回も相手を試問・打診している。

知的ゲームを楽しむ場合、相手の反応は予想しなければならない。そして最も要求されるのは、相手の気持ちの上をいくことであり、質問するにふさわしい状況が来るまで待つことである。今回もそれにあたっている。中宮の御前に「御かたがた・君たち・上人など、いと多くさぶらへば」という物理的状況があったため、仕方なしに「庇の柱に寄りかかりて、女房と物語してゐた」清少納言に向かって、「物を投げ賜はせた」という訳ではあるまい。好機到来と中宮は判断したのである。清少納言が「すべて、人に一に思はれずは、何にかはせむ。ただいみじう、なかなか憎まれ、悪しうせられてあらむ。二、三にては死ぬともあらじ。一にてをあらむ。」などと言って、女房達と笑い合っていたのは何といっても日常での雑談であり、打ち解けた場での発言である。それを逆手にとってやろうというのである。「御かたがた・君たち・上人」という中宮の御前に伺候している人々は、政治の中枢を司る人々であり、当代きっての文化人達である。緊張の強いられる非日常の席で先日同様大言壮語できるかという訳である。

中宮の言葉を目にした清少納言は、突然とんできた質問の意図を察知した。察知したからこそ「九品蓮台の間には、下品と言ふとも。(中宮様にかわいがっていただけるなら、最下級でも結構です。)」と答えたのである。この時、清少納言の判断はどうだったのであろうか。先日の発言を踏まえての中宮の質問であることを察知したほどの清少納言であるから、どのように答えたらいいのか多様に検討したはずである。検討した上での返答であることを考えれば、「九品蓮台の間には、下品といふとも。」という言葉は、清少納言にとっての模範解答である。「九品蓮台の間」「下品」などと手の込んだ言葉を用いたのは、先日の自分の発言を聞いた女房達が「(法華経でいう)一乗の法ななり。」と言って笑ったことに関連させて、「中宮様にかわいがっていただける」のを「九品蓮台(極楽往生の九段階)の間」とたとえたのである。そこまで考えての返答である。さらに、「九品蓮台の間にても、一にてをあらん。(中宮様にかわいがってい

ただけるにしても、一番でいたい。」などと、先日の発言と同じ趣旨の返答をしてもよかったのである。その方が筋が通っている。この答を用意しなかったのは、「御かたがた・君たち・上人」の前で遠慮があったのか、中宮の打診の意図をはぐらかして相手の出方をみようとしたのか、それとも中宮に対して自分の本心を吐露したのか、判然としないがすべてに対応できる答になっている。後の清少納言の言葉と人前でしゃべるのではなく「筆・紙など賜はせ」たのでそれに書いて差し出せる状況とを考えると、本心を述べたと考えてよいのではあるまいか。中宮は別格という訳である。

清少納言の言葉を見て、中宮は「むげに思ひ屈しにけり。言ひ閉ぢめつることは、さてこそあらめ。(ちっとも気勢があがらないね。一度口にしたことは、そのまま押し通すのがいいのです。)」と答える。このあたりから、本音のやりとりになる。中宮は清少納言の答に落第点を与えたのである。叱責である。相手によって答を変えたからである。しかし、これはやんわりと相手に疑問を提示した程度にとどまっている。どこまで考えて中宮が清少納言に最初の言葉をかけたか、この段階では明らかになっていない。中宮の言葉を見て、清少納言は「それは、人に従ひてこそ。(それは相手次第のことです。)」と返答する。この清少納言の返事は、先の「九品蓮台の間には、(下品といふとも。)」と同じ気持ちから出ている。あくまで中宮は別格の存在であると言いたいのであり、中宮に対して敬愛の気持ちを示そうとしたのである。それがまた中宮の気に入らない。「それが悪きぞかし。第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ。(それがよくないのです。第一の人に自分もまた第一に愛されようと思わなければ。)」これが中宮が最終的に与えた言葉である。この言葉は清少納言に対しては、説諭の意味を持つ。勿論、面と向かってしかめ面をして言ったことばではないにしても。先ほどの中宮の言葉に関連づければ、一度口にしたことを押し通していないことを叱責しているように見える。しかし、そうではない。もっと深い意味を持たせている。「第一の人に、また一に思はれむ」という心の持ち方こそ大切にしなければならない、と説いているのである。そういう意味での説諭である。「すべて、人に一に思はれずは、何にかはせむ。ただいみじう、なかなか憎まれ悪しうせられてあらむ。二、三にては死ぬともあらじ。一にてをあらむ。」という清少納言の日頃の言動を、積極的に評価してのことである。清少納言の言葉が、彼女の信条を表しているならば、その信条こそ大切にすべきであると説いているのである。なぜなら、「第一の人に、また一に思はれ」ようと思えば、すべてに抜きんでていなければならないからである。すべてに抜きんでるためには、深い教養と完成された人格を持たねばならない。「第一の人に、また一に思はれむ」というように心を働かせることは、人間の成長を促すのである。このような心の持ち方は、決して人間を傲慢にするものではない。そしてまた清少納言にとって嬉しいことには、中宮の言葉は説諭の意味を持ちながらも、「おまえをかわいがってやろう。」という意思表示になっているのである。

この話をまとめるにあたって、清少納言は「をかし」と表現している。何を「をかし」ととらえたのか。中宮の最初の言葉に対して適切に応答できたにしても、以後の中宮の言葉は清少納言の思いを

はずれて、はるかに深い意味を持ちまた深い示唆に富んで、中宮の言葉を聞いているだけで面白いのである。加えて、「おまえのことを思ってやろう。」という意思表示は、清少納言を喜ばさずにはいない。「をかし」には、「おもしろい」の意味に加えて「うれしい」感情が籠もっている。この章段を書きながら、清少納言は会心の笑みをこぼしたにちがいない。

二

以上の教材研究を踏まえて、学習指導案を次のように作成した。

本時の指導過程

高等学校　国語科学習指導案

教材　枕草子一〇一段「御かたがた」（二時間扱い、本時は第一時）

本時の指導目標

1、中宮定子と清少納言の言葉のやりとりを通して、相手に対するそれぞれの思いを読み取らせる。
2、言動や会話から、作中人物の人物像をとらえさせる。
3、読解に即して、本文の構成をとらえさせる。
4、読解に即して、古語の意味や古典文法を身につける力を養わせる。

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を明らかにする。 2、通読する。 3、言葉のやりとりの人物関係を明らかにする。 4、中宮定子の「思ふべしや否や～」	・登場人物の言葉のやりとりに込められたそれぞれの心理を読み取ることを明示する。 ・通読の前に、「　　」のついている部分に1～7までの番号をつけさせる。 ・「　　」の後の表現に注目すれば、人物の異同が判別できることに気付かせる。 ・「　　」1～7の中で同一人物のものをおさえさせる。 ・「　　」が、誰から誰へのものか明らかにさせる。 ・最高敬語に注目させ、清少納言の相手が中宮定子であることをとらえさせる。 ・「中宮定子の『思ふべしや否や～』の言葉には、どういうねらい

の言葉が出されるまでの経緯と言葉に込められたねらいをとらえる。 (1) 本文の構成をとらえる。 (2) 日頃の言動から、清少納言の人となりを考える。 (3) 中宮定子の言葉に込められたねらいをとらえる。	があるか」から切り込むが、この段階では問題を提示するにとどめる。 ・「　」1の答が「　」4であることから、本文が三段構成であることをとらえさせる。 ・第二段が時間的に最も早いことを理解させ、第二段を踏まえての「　」1であることをとらえさせる。 ・「　」2から、清少納言の人となりをとらえさせる。 ・人々（中宮付きの他の女房達）の笑いに、清少納言に対するどのような気持ちがあるのか考えさせ、清少納言の人となりをとらえさせる。 ・「御かたがた・君たち・上人」のいる状況であることをとらえさせる。 ・「御かたがた・君たち・上人」のいる状況が、第二段の状況（日頃の打ち解けた御前の有様）と異なることをとらえさせる、 ・中宮が「物を投げ賜はせ」た理由（二人の位置関係と清少納言に自由に答えさせようという配慮）をとらえさせる。 ・日頃と異なる状況（緊張感を強いられる状況）のもとで清少納言がどのように答えるか試すところに中宮定子のねらいがあることをとらえさせる。

教材　枕草子一〇一段「御かたがた」（二時間扱い、本時は第二時）

本時の指導目標

1、中宮定子と清少納言の言葉のやりとりを通して、相手に対するそれぞれの思いを読み取らせる。

2、読解に即して、古語や古典文法を身につける力を養わ

せる。

本時の指導過程

3、中宮定子と清少納言のものの見方や考え方を検討させ、学習者自身のものの見方・考え方の拡充深化をはかる。

学習活動	指導上の留意点
1、本時の学習目標を明らかにする。	・言葉のやりとりに込められた中宮定子と清少納言の気持ちを読み取ることと、二人のものの見方を検討することを明示する。
2、中宮定子と清少納言の言葉のやりとりに込められた問題点を明らかにする。 (1)「九品蓮台の間には～」と返答した清少納言の答の価値を検討する。	・中宮定子の言葉に込められたねらいが理解できたにもかかわらず、清少納言がなぜ「九品蓮台の間には～」と答えたか考えさせる。 (第二段の「～筋なめり。」をおさえさせる。) ・「九品蓮台、下品」の比喩の意味内容をとらえさせる。 ・他にどういう答え方があるのか検討させる。 ・「九品蓮台の間にても、一にてをあらむ。」を導く。 ・「九品蓮台には、下品と言ふとも。」の方が、清少納言にとっては中宮に対して敬愛の意味が込められ、模範解答であることをとらえさせる。(迫従から敬愛まで幅広く生徒の答を採用する。) ・清少納言の「九品蓮台の間には～」の答を、中宮定子が「いとわろし。」と評価した理由が、「言ひ閉ぢめつることは、さてこそあらめ。」であることをひとまずおさえる。(「叱責」とする。) ・清少納言の「それは人に従ひてこそ。」の答が、「九品蓮台の間には～」と同じ気持ちから出ていることをとらえさせる。
(2)「むげに思ひ屈しにけり。～」以下の会話に込められた中宮定子と清少納言の思いをとらえる。	

(3) 本文の末尾の「をかし」に込められた清少納言の思いとらえる。	・中宮定子の「そが悪きぞかし。～」の言葉が、「むげに思ひ屈しにけり。～」より内容的に深まっていることをとらえさせる。 ・中宮定子の「第一の人に、また一に思にれむとこそ思はめ。」という言葉が、清少納言の「すべて、人に一に思はれずは、何にかはせむ。～」という日頃の言動(「信念」としても可)を積極的に評価していることをとらえさせる。(「説諭」とする。) ・「こそ～め」をおさえる。 ・中宮定子に叱責されたにもかかわらず、「をかし」とまとめた清少納言の気持ちをとらえさせる。 ・中宮定子の「第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ。」という言葉が、清少納言に「一に思はむ」という内容を暗示していることを理解させ、「をかし」‖「うれし」となることをとらえさせる。 ・清少納言の「すべて人に一に思はれずは何にかはせむ。～」という言葉と中宮定子の「第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ。」という言葉を検討する。 ・二人の考え方が、現代にも通用するものかどうか、この時代特有の考え方かどうか検討させる。 ・「第一の人」は、現代では「自分の尊敬できる人」にでも置き換えられることを提示する。
3、中宮定子と清少納言のものの見方・考え方を検討する。	
4、まとめをする。	

＊ 板書を次のように作成した。(基本的構造は崩さず、二時間をかけて作成する。)

御かたがた（枕草子一〇一段）

中宮定子（母屋）

（会話文2）

説諭——信念の中身…良

7「第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ。」

叱責——相手によって答を変えたこと

5「言ひ閉ぢめつることは、さてこそあらめ。」

ねらいは？——試問・打診

1「思ふべしや否や。人、第一ならずはいかに。」

「九品蓮台の間にても、

一にてをあらむ。」——不採用

4「九品蓮台の間には、

下品と言うふとも。」—採用（模範解答）

敬愛＝中宮賛美

6「人に従ひてこそ。」

清少納言（庇の間）

御かたがた・君たち・上人

非日常——緊張

大言壮語

2「すべて、人に一に思はれずは何にかはせん。…」

日常——雑談

からかい？

賛　美？

3「一乗の法なり。」

人々（他の女房達）

付記　この教材は昭和五七年六月二十二日、広島大学附属高等学校在職中に、Ⅱ年2組で授業を行った。教育実習中の示範授業と国語科の研究授業を兼ねた授業であった。授業の切り込みが大き過ぎて、切り込みにつまずいた授業であった。示範授業に加えて、予習をしてきている生徒にも読みごたえのある授業をと気張ったことが、つまずいた最大の原因である。「つまずきの原因と克服Ⅰ」として、昭和五九年度の広島大学附属中高等学校の研究大会で発表した。今回、それに教材研究を付加して教材研究から授業に至るまでの詳細を形にしたものである。なお、ここに示した指導案は、「つまずき」を克服するために書き直し、「つまずきの原因と克服Ⅰ」の発表直前に実践したものである。

（広島文教女子大学）